

## 「居心地」と「居場所」の概念の検討

西川 絹 恵

キーワード：居心地、居場所、身体性、関係性、主観的時間性

### 1 はじめに

「居心地が良い場」や「居心地の良い空間」など「居心地」という言葉が日常的に使われている。論文の中にも「居心地」ということばが使われているが、それぞれの研究者が感じるままに使用されている場合がほとんどである。「居心地」の定義についてはほとんど明確にされておらず、大多数が「居心地」を日常用語としての使い方をしていたり、「居場所」と同じような感じで使われていたりする。

一方、「居場所」については様々な研究がされているのではあるが、それぞれの目的によって定義が異なるため、先行研究においても居場所の定義は多義的であり、結果的に「居場所」は統一したイメージで使われていないと言える。さらに「居心地」についていえば、研究者により何となく使われている現状が浮かび上がる。例えば、「居心地の良い居場所」、「居場所を作る為には居心地をよくすることが大切である」と抽写されることも多い。

しかし居場所と居心地を別の概念でとらえることも必要であると考え。実際には「居場所」という用語だけでは「居心地」というものを包括しきれない場合もあるのではないだろうか。

例えば昔話にある「浦島太郎」の物語においても居心地と居場所の違いが見えてくる。浦島太郎のあらすじは以下の通りである。

漁師の浦島太郎は年老いた両親と三人で暮らしていたが、浜辺で子ども達に一匹の子ガメがいじめられているところを助けたことから、お礼にと竜宮城に招待される。竜宮城では美しい乙姫さまに歓迎され、魚たちの踊りや、素敵なお馳走でもてなされ、時間も忘れて楽しい毎日を過ごしたが、何日か経つと浦島太郎は村に残してきた両親が気になって、乙姫さまに家に帰りたいと暇乞いをする。すると乙姫さまは「決してふたを開けてはいけない」といって、お土産に玉手箱を渡した。そして浦島太郎は亀の背に乗って村に帰っていくのである。しかし浦島太郎が竜宮城で過ごしているうちに、地上では何十年も経っており、故郷の両親はすでに亡くなって、村の様子も変わり果てて

いた。寂しくなった浦島太郎は、玉手箱の蓋を開けると、中から白い煙がもくもくと出て、たちまち浦島太郎は白髪の老人になってしまった。

浦島太郎にとっては時間も忘れるほど竜宮城は居心地の良い場所だったのだろう。しかしふと家に残してきた両親を思い出すと気になってしまう。そうすると浦島太郎は、竜宮城は自分にとって居心地は良いのだが、ここは自分の居場所ではないと自己認識するに至る。そして自分の本来の居場所である家に帰りたいたいと思いはじめるのである。

旅に出ると居心地の良い場所はたくさんある。しかし我々は家に本来の居場所である家に戻ってくる。逆に残業が多くて居心地が悪い会社でも自分の居場所だと思う人もいる。現実には決して居心地がいいばかりではなくても、大変さを抱えながら、それでも居場所を構築する人もいるのである。

従って「居心地」は「居場所」の概念ではとらえられないものがあるのではないかと考える。本論文では「居心地」「居場所」の差異について先行研究を明らかにし、「居心地」と「居場所」それぞれの概念の必要性について論じるものとする。

## 2 「居場所」についての先行研究

居場所という言葉は日常よくつかわれているが、学術的概念としても様々な研究者がとりあげている。しかし、従来の研究において「居場所」の定義は共通のものではなく、各研究者の研究により違いがみられる。ここでは各研究者が取り上げている先行研究の中から「居場所概念」、および「居場所の構成要素」を取り出していくことにする。

私たちは日常生活の中でも「自分の居場所がある」「居場所がない」という言葉を使うことがある。広辞苑（第六版 2008）では、「居場所」とは「いるところ。いどころ」となっている。居場所については、主に子どもや青年期の研究が中心に様々な研究がされている。1992年に文部省（現文部科学省）が行政の立場から「学校不適応対策調査研究協力者会議」で作成した、「登校拒否（不登校）問題について - 児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して - 」と題する報告書の中にも居場所という言葉が使われている。その中で登校拒否（不登校）はどの子どもにも起こりうるという視点に立って、学校が子どもにとって自己の存在感を実感でき精神的に安心できる場所（心の居場所）であることの必要性を指摘し、適応指導教室などが子どもの居場所として各市町村に積極的に作られるようになった。このころから「居場所」についての研究が急速に増えていった。

居場所の定義については、中島・廣出・小長井（2007）はこれまでの「居場所」研究で定義された概念をまとめ、その結論として「居場所」の定義を「他者から認められたり、他者から自由になって自分を取り戻したりして得られるような『自分を確認できる場所』」（p.95）と定義している。そして共通する要素として、他者との関わりの中で自分を確認できる「社会的居場所」と他者と離れ

て自分が取り戻せる「個人的居場所」に分かれていること、そして「居場所」には物理面・心理面両方を含んでいると述べている。

中村・岡田（2016）は職業生活における心理的居場所感を、「他者から頼りにされ役に立っていると感じられるかどうか、安心して落ち着いた気持ちでいられるかどうか、自分を見失わず自分らしくいられるかどうかという感覚である」（p.56）と定義している。

また中藤（2017）は従来の居場所概念を従来の研究を踏まえて、主体としての身体が伴う安心でき自分らしく居られる場所と説明している。

大澤（2019）は「居場所」の先行研究から、『居場所』とは自分の身体が生きて存在する物理的な『場』であるとともに、他者との相互承認的な『関係』がある場である」（p.66）と整理している。

次に、居場所の構成要素についての研究について、富永・北山（2003）は居場所がある時の尺度として「安心感」「受容的環境」「連帯感」「役割」を作成している。

石川（2004）はひきこもりの人たちの「居場所」における研究において、「他者との関係性」と「自分自身を語るための語彙」という2つの性質があるとしている。

杉本・庄司（2006）は「居場所」の心理的機能の構造を分析をして、「居場所」の心理的機能に、「被受容感」「精神的安定」「行動の自由」「思考・内省」「自己肯定感」「他者からの自由」の6因子があることを明らかにしている。

萩原（2009）は現象学的考察から「居場所」は「場所性・身体性、関係性、時間性、の大きく3つの構成要素から成る」（p.76）と述べている。

原田・瀧脇（2014）は「居場所」を2つに分け、「社会的居場所」の要素を「承認的居場所」「受容的居場所」「所属的居場所」、「個人的居場所」の要素を「開放的居場所」「内省的居場所」の要素からなるとしている。

則定（2008）は青年期を対象とした心理的居場所を「心の拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分を受容される場」と定義している。さらに則定（2016）は心理的居場所感尺度を作成し、下位尺度を「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」の4つに分けられることを明らかにしている。

このように「居場所」は、最近の研究では物理的な場所だけでなく心理的側面が主として注目されるようになったこと、社会的居場所と個人的居場所では居場所としての意味合いの違いがあること、いふなれば他者との関係性の有無によって自己の存在確認ができる「場」と、一人になることで自分自身と向き合い、自己の存在確認ができる場でもあるといえる。

また「居場所」は「ある」「ない」で表現される。北山（1993）や堤（2002）は「居場所」は「場所がない」という感覚を通してこそ実感されるとしている。原田・瀧脇（2014）はこの感覚を以下のようにあらわしている。

つまり、居場所という言葉が実感を伴って現れるときというのは、生きづらさを実感するなど、自己がバラバラになってしまうような否定的な自己意識が高揚された時であるといえよう。逆に言えば、居場所を持っている状態というのは、自分らしさを実感し、自己にまとまりがある状態であるといえよう。(p.123)

自分にとっての「居場所」は自己の存在感をプラス、または肯定的にとらえ自分らしいという実感があれば「居場所」があると思うようになり、「居場所」があるという認識に至るが、自己の存在感をマイナス、または否定的にとらえる実感があれば「居場所がない」と思うようになり「居場所」がないという認識に至るということである。

以上、先行研究による「居場所」の諸側面を明確にした。これをもとに「居心地」との差異を論じることにする。

### 3 「居心地」についての先行研究

「居心地」という言葉も日常的によく使われている。広辞苑(第六版 2008)では、「居心地」とは「そこにいるときのこころもち。すみごち」と記されている。居心地についての研究は、街や建物の建築設計や生活環境といった、物理的空間から見出す居心地についての研究は多いが、居心地の概念に対する研究はあまりなされていない現状がある。

森山・入山(2008)は居心地の良さを公園を例にあげて、人は自由に行動しながらも他者の存在を意識し、互いにかかわることがない関係に居心地の良さを感じると説明している。

菅野・木村(2019)は居心地の良い空間を「任意活動を促す場」と定義した。そして居心地の良し悪しは「他者」と「空間の広さ」、「眺める対象」という3つの要素から自分がいる場所の雰囲気や環境を掴んで判断しており、「視点場」であり、適度に「他者」が存在する場所が居心地の良い空間であると述べている。

内田(2020)は住宅において、考える頭で考えた快適ではなく、天然素材の物でつくられた床や壁に囲まれて生活することで五感が整い、住む人自身も本来の機能や感覚をとりもどし、体や心が無意識のうちに癒されることが居心地の良さにつながることを考察している。

保育や教育の分野における「居心地」の研究では子ども達に対するよい居心地づくりについて、主に人間関係に主眼を置いた研究が多くみられる。

岡本・岡田(2020)は「夜型子育てサロンでは、支援者や仲間から自分が受け入れられたと感じると、居心地がよくなり、そこが居場所になる。」と夜型子育てサロンの居心地について結論付けている。

また河内・小林(2009)は児童・生徒の学校居心地感尺度を10項目で作成した。小林は教員の居心地感についても本尺度の「学校」を「職場」に置き換えることで居心地感をあらわせると述べ

ている。居心地感尺度の10項目は①学校になじんでいる②学校には自由に話せる雰囲気がある③学校でゆったりしていただける④学校で自分は幸せである⑤学校で友達と助け合っている⑥学校で居心地がよい⑦学校で自分は認められている⑧学校で楽にいられる⑨学校で自分は受け入れられている⑩学校で安心していられる、となっているが、これらの項目は居場所との構成要素の違いがあまり見られない。

現状では多くの研究が心理的居場所感と居心地の差異があいまいで、居心地が良いと居場所ができる、または二つの言葉をほぼ同じような感覚でとらえているものが多い。

西川（2020）は、場の居心地の良さを感じる要因について、「その場にいると安心する」「良い方向に循環している」「風通しの良い雰囲気がある」「行動の自由（飲食やトイレ・雑談・休息のタイミングなど）がある」の4項目が大きく寄与していることを明らかにしている。そしてこの条件がたとえば、苦手な人の存在や人目という人間関係の要因の影響が緩和される可能性が高いということ述べている。要するに居心地の悪い場であるからこそ人目や苦手な人が気になるのであり、居心地の良い場であれば人目があっても、苦手な人がいてもそんなに気にならなくなるという事である。そして人間関係も場の中では要因の一つに過ぎず、もっとマクロな視点から「場」というものを意識して、安心できる場、良い方向に循環している場を作り上げることが居心地をよくすることに大きく寄与していくと論じている。

以上のことから、居心地についての構成要素をとらえた先行研究はわずかではあるが、現状において個々の研究から導き出せる「居心地」の諸側面を明確にした。ここから「居心地」の構成要素を検討し、「居場所」との差異を論じることとする。

#### 4 居場所の構成要素と居心地の構成要素

まずは「居場所」についての構成要素を大きく分けてまとめていく。「受容的環境」「被受容感」「受容的居場所」の分類は「被受容感」と考えられる。「他者との関係性」「連帯感」「関係性」の分類は「他者との関係性」と考えられる。「自分自身を語るための語彙」「内省的居場所」「思考・内省」の分類は「思考・内省」と考えられる。「承認的居場所」「所属的居場所」「役割感」の分類は「役割感」と考えられる。「本来感」「開放的居場所」「他者からの自由」「行動の自由」「自己肯定感」の分類は「本来感」と考えられる。「安心感」「精神的安定」の分類は「安心感」と考えられる。

これは富永・北山や則定の研究から得られた居場所要素に最も近く、富永・北山の示す4つの構成要素である「安心感」「受容的環境」「連帯感」「役割」に「思考・内省」と「本来感」を加えたものであり、則定の示している4つの構成要素である「本来感」「役割感」「被受容感」「安心感」に「他者との関係」と「思考・内省」を加えたものである。したがって「居場所」の構成要素は「被

受容感」「他者との関係性」「思考・内省」「本来感」「役割感」「安心感」に大きく分類される。

但し萩原の示している「居場所」の構成要素はこれらの中では若干異質な色合いを持っている。萩原（2009、p.76）は「居場所」の構成要素について以下のように論じている。

「ここまで居場所の獲得と喪失の経験を手がかりに、居場所の存立構造の解明を試みてきた。そこで明らかになったことを、整理してみると、居場所は場所性・身体性、関係性、時間性の大きく三つの構成要素から成ることがわかる。第一に場所性・身体性である。他者や事物、自然とのかかわりにおいて身の置き所や身を浸し、住まわせることのできる「隙間」があるかどうかは居場所の生成喪失に結びついている。また、身体は世界（他者・事物・自然）と「わたし」の経験の基盤であり存在根拠として身体があること、そうした「生きられた身体」が現実世界と出会い、交流し、自己と世界の意味の生成母体となり、感得する基盤となっている。第二に、関係性である。現実世界との生き生きとした活動的・応答的なかかわりにおいて、世界と自己の意味が生成し、「わたし」という身体において感得される。逆に、他者からの操作的で排除的な関係性、言い換えれば他者からの一方的な目論見をもった関係性や、外部に向けて偽装する自己をもって他者と操作的にかかわろうとする関係性では、生き生きとした現実との交流回路を断絶させ、自らの位置取りを見失う。第三に、時間性である。他者との応答的な関係においてそのつど獲得される自らの「位置」が、私たちの方向感覚を生み、展望感覚を生み出している。そうした内から生成する展望感覚において、「いま」という時間とここにいる「わたし」の存在意味が充溢される。以上の三つの構成要素は相互浸透的に互いに絡みあい、「わたし」という存在を支えている（略）。その意味で、居場所というのは、自己と他者・事物・自然との応答的な関係において生成し、生きられた身体（身体的自己）において感得される「わたし」の生成母体といえるだろう。」

萩原のいう「居場所」における「場所性・身体性」は感じる場所であり、その主体である身体が必要であるということになる。他の先行研究においては「身体」という部分があまり言及されていない。次に萩原のいう「関係性」とは世界（他者・事物・物）とのかかわりに対して「わたしの身体」が感得する関係性であり、相互性・応答性を指す。他の先行研究においては、他者との関係性に不具合が生じた場合に自分の居場所を見失うということであり、他者との関係性は主に「人間関係」を指すことが多い。しかし萩原は「世界」という言葉を使い関係性を持つ対象を「他者・事物・物」と広げている。また、萩原は「時間性」とは他者との応答的な関係において自分の位置を把握することができ、充実したいまという感覚により自分の存在意味がでてくるとして、時間について触れているが先行研究においては「時間」という要素は明確に取り入れられていない。以上の点において萩原の「居場所」に対する主張には他の研究者との違いがみられる。

次に「居心地」についての構成要素を大きく分けてまとめていく。まず居心地は物理的居場所感や心理的居場所と違い、良し悪し、または快・不快と感ずることはあってもその感覚がなくなることはない。そして心理的感覚だけでなく、場や物理的な物の影響を受けて身体的に五感で感ずる感覚も含まれると考えられる。したがってここでは居心地を「存在する場における個人の情動・気分を伴う身体的・心理的感覚」と定義する。

建築学分野の「居心地」では空間の観点から「場所性」を重視した「居心地」に焦点を当てている。そして「他者との関係性」や「自由」を「居心地」の構成要素としている。またその空間（住宅）において居心地は思考により認知されたものではなく、「五感から感ずる癒し」が居心地の良さにつながることから、「身体性」を含むと解釈できる。

次に保育や教育の分野における「居心地」の研究では主に人間関係に主眼を置いた研究が多くみられることを述べた。ここでは主に居心地感尺度の10項目（⑥学校で居心地がよい、を除く）を分類してみると①学校になじんでいる、②学校には自由に話せる雰囲気がある、③学校でゆったりしてられる、⑧学校で楽にられる、は「身体性」、⑤学校で友達と助け合っている⑦学校で自分は認められている⑨学校で自分は受け入れられている、は「関係性（相互性・応答性）」、④学校で自分は幸せである、は「時間性」⑩学校で安心してられる、は「安心感」、この4つに大きく分類される。

そして西川（2020）の場の居心地の良さに寄与する構成要素を分類すると、「その場にいると安心する」は「安心感」、「風通しの良い雰囲気がある」は「関係性」、「行動の自由（飲食やトイレ・雑談・休息のタイミングなど）がある」は「身体性」、「良い方向に循環している」は「時間性」に分類される。西川は「場の居心地」についての構成要素の研究をしていることから、ここに「場所性」も含まれると考える。

以上のことをまとめると「居場所」の構成要素は「被受容感」「他者との関係性」「思考・内省」「本来感」「役割感」「安心感」の6つが大きな構成要素となっていると考えられる。一方「居心地」は「場所性」「身体性」「関係性」「時間性」「安心感」の5つが大きな構成要素となると考えられる。

## 5 居場所と居心地の差異

ここで「居場所」と「居心地」の構成要素を比較すると、「安心感」「場所性」「他者との関係性」は共通するが、「身体性」「時間性」「事物・物との関係性」は「居場所」の構成要素には含まれていないことが分かった。（「場所性」については「居場所」という概念の前提として「居場所感」が含まれているため構成要素として表れていないが共通性はあると考える。）逆に言えば「居心地」には「被受容感」「思考・内省」「本来感」「役割感」の構成要素が含まれていないことになる。したがっ

て「居場所」と「居心地」は共通する点もあるが異なる点もあるということが明らかになった（図表1）。

図表1 先行研究による「居場所」と「居心地」の構成要素

	共通要素	非共通要素
居場所	「安心感」「場所性」	「被受容感」「思考・内省」「本来感」「役割感」
居心地	「他者との関係性」	「身体性」「時間性」「事物・物との関係性」

「居場所」のところで上述した萩原の「居場所」の構成要素と「居心地」の構成要素は近似していると思われる。そこから考えるに「居場所」と「居心地」の差異は、他の先行研究者と萩原の「居場所」の差異が非常に参考になる。ただし、萩原の構成要素は抽象的であるため、「居心地」を説明するには不十分であることから、さらにこれを精緻化することで「居心地」という概念をはっきりとさせることが必要である。

まず「居心地」においては「身体性」の要素が最も重んじられる。建築学分野では五感を通じて感じる身体的な居心地の良さを指摘している。さらに西川が居心地の要素として取り上げた「行動の自由」とは飲食やトイレ・雑談・休息のタイミングなどであり、身体内の生理的な不均衡によって生じ、その不均衡を解消したいと思った時（一次的欲求ともいう）に、身体を動かすことができる自由のことを指している。

西川が2020年に施行した「職場における『場』について」のインターネット調査(注1)において「仕事をする『場』の居心地を今よりも良くすることについて何を思い浮かべますか。あなたのご意見をご自由にお聞かせください。」という項目の自由回答では、有効回答425人の内194人(45.6%)が「居心地」をよくするために「物」を思い浮かべている。その中でも「椅子」と答えた人が18人(9.3%)おり、このことから示唆されることは、「居心地」の良さを今より良くするために、自分が座る場所が心地よく感じるということが重視されているという事である。椅子が心地よいと感じるのはまさに自己の身体である。自分の体が座り心地がよく、「快」と感じる場が良い居心地であることが、身体感覚を通じて感じられる。逆に座り心地が悪い椅子であった場合は「不快」と感じ、居心地が悪い場と感じるのである。

このように身体は「居心地」の受信機ともなる役割を持っており、自分がいる場を、身体の五感を通じて起こる情動・気分によって「居心地」の良し悪しを感じている。例えば場の「居心地」が良いときに体がリラックスしてのではなく、その場の何等かとの関係性において身体がリラックスしているから、身体を通じて気分が変容し「居心地」が良いという心理反応を起こすのである。

「身体性」とは、自分の身体が萩原の言う世界（他者・事物・物）との関係性の中から本来のあべき自由度を保っていることであるといえる。そしてその身体性は場から感じ取るものであるため「場所性・身体性」という括りは妥当であるといえる。

次に「関係性」であるが、「居心地」における「関係性」は「他者との関係性」に限定されるものではない。萩原のいう「居場所」における世界との関係性、いわば他者・事物・物をも含む関係性が重要である。居心地をよくするために思いつくことに「物」を思いうかべた人が46.5%いたことから「居心地」と物の関係性は重要であるということがわかる。但し、萩原は「居場所」における世界との関係性に「事物」と表現したが、「居心地」についてはもう少し広い概念で説明することが望ましい。理由としては、西川（2020）の先行研究から、「風通しの良い雰囲気がある」ということが「居心地」の要素として寄与していること、そしてパンデミック前とパンデミック渦中では、働く場の居心地についてオフィスの居心地や自宅の居心地の変化に有意差が認められたことから、パンデミックは場の居心地に関係があるということが言え、社会状況の変化も居心地の良さに影響を与えることがわかっている。したがって「居心地」については、さらにパンデミックのような社会現象や自然現象をも含むため、そのような関係性も包括することが必要であることから「事物」ではなく「現象」という言葉を用いることにする。

最後に「時間性」についてであるが、ここについては萩原の解釈とは若干の違いがある。萩原は「時間性」については展望感覚があり、そこから「いま」という時間とここにいる私の存在意味が充溢されると説明をしているが、「居心地」の「時間性」は時間を忘れて、もしくは通常より長く感じるなど、時間感覚が正確ではなくなり、アバウトになる感覚を指す。特に居心地の良いときの「時間性」は自己、時間、周囲の状況を忘れ、自分をもっと大きな何かの一部であると感じることにより引き起こされる心理的な感覚であると考えられる。したがって居心地の良さや悪さが、時間感覚のゆがみを生じさせたり、時間への主観的な経験を変化させると思われる。これについてはチクセントミハイ（1990）のフロー状態の時間感覚に近似している。フロー状態の特徴と発生を促す条件として「注意の集中」「意識と活動の融合」「自己意識の消失」「コントロール感」「時間感覚の変容」「自己目的性」「楽しさ」「流れ感」の8つを挙げている。フロー状態においては通常的时间感覚とは異なり、実際の経過時間よりも短く感じたり、逆に短い時間でありながらゆっくりと時が進んでいるように感じたりする。このような時間経過を感じることを「時間感覚の変容」としているが、まさに「居心地」の「時間性」もこのような状態であるといえる。

従って「居心地」とは「場における身体性」「他者・現象・物との関係性」「主観的時間性」の3つの構成要素によって構成されているといえよう。

## 6 おわりに

「居心地」と「居場所」をそれぞれの先行研究から定義、構成要素についてその差異を明らかにしながら、主に構成要素の違いから論じてきた。その結果、この2つは重なる部分もあるが違う側面も持ち合わせているという結論になり、「居場所」とは異なった「居心地」の定義と「身体性」「時

間性」「現象・物との関係性」の3つの構成要素を得るに至った。

ここでもう一度「居場所」と「居心地」について、全体から2つの差異を考察しておきたい。一つ目は、「居場所」は他者から認められたり、自分自身を客観的に見つめなおしたりする時に感じるものであり、主観性だけでなく客観性をあわせ持つ側面もある。一方「居心地」はフロー状態における「自己意識の消失」に近似しており、居心地を感じているときには自分自身を客体化せず主体的に感じているのである。そしてもう一つの違いは「居心地」は「自己目的的」であり、「居心地」を感じることで自分が目的である。しかし「居場所」は自己完結的な側面だけではなく「他者依存的」な面も持ち合わせており、他者からの承認や役割感を得ることが目的となる場合もある。

「居場所」という概念は我々にとって非常に重要なものである。ただ、「居場所」がある、というだけでは、物理的な場所であったり、心理的居場所感という本人の認識のありようを説明するものとなる。それとは別に「居心地」という概念を構成し、「居心地」の良い「居場所」があると表現することで、「居場所」概念の物理的な場所と、人・自分自身との関係性による自己認識、そして「居場所」概念の現象・物との関係性や変則的な時間性、そして五感や情動・気分という中で身体が感じる身体性を包含することになる。

このように「居心地」と「居場所」は互いに足りない部分を補い合うような関係性でもあり、この2つの概念が存在することで、「居心地」や「居場所」がより広く深い概念として相乗的な意味を創り出すのではないかと考えられる。

#### 注

- 1) 2020年「働く「場」の居心地に影響を与える要因—インターネット調査を用いた定量調査による検討—」『中京企業研究』42において一部発表済みである。

#### 参考文献

- 萩原建次郎(2009)「子ども・若者にとっての居場所の意味再考--身体的自己の抑圧と生成の関係構造分析から」『立教大学教育学科研究年報』(53)、pp.65-77
- 原田 克巳・滝脇 裕哉 (2014)「居場所概念の再構成と居場所尺度の作成」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』(6)、pp.119-13.
- 石川良子 (2004)「〈ひきこもり〉における『居場所』の二義性」『アディクションと家族』20 (4)、pp.377-387
- 石田潤 (2010)「内発的動機づけ論としてのフロー理論の意義と課題」『人文論集』45、pp.39-47
- 北山修 (1993)『自分と居場所』岩崎学術出版社
- 小林正幸 (監) 早川恵子・大熊雅士・副島・賢和 (編) (2009)『学校でしかできない不登校支援と未然防止—個別支援シートを用いたサポートシステムの構築』東洋館出版、pp.14-15

- Csikszentmihalyi, M (1997) Finding Flow: The Psychology Of Engagement With Everyday Life (Masterminds Series) .NewYork : Basic Books (大森弘 [監訳] 2010『フロー体験入門 楽しみと創造の心理学』世界思想社)
- 文部省 (1992) 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して—学校不適応対策調査研究協力者会議報告『教育委員会会報』44、pp.25-29.
- 中村准子、岡田昌毅 (2016) 「企業で働く人の職業生活における心理的居場所感に関する研究」『産業・組織心理学研究』第30巻、第1号、pp.45-58
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 (2007) 「『居場所』概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要』58、pp.77-97
- 中藤信哉 (2017) 『心理臨床と「居場所」』創元社
- 西川絹恵 (2020) 「働く「場」の居心地に影響を与える要因—インターネット調査を用いた定量調査による検討—」『中京企業研究』42、中京大学企業研究所 (印刷中)
- 則定百合子 (2008) 「青年期における心理的居場所感の発達の变化」『カウンセリング研究』41、pp.64-72
- 則定百合子 (2016) 『青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する研究』風間書房
- 大澤朋子 (2019) 「社会的養護と子どもの『居場所』」『実践女子大学生活科学部紀要』第56号、pp.61-68
- 杉本希映・庄司一子 (2006) 「『居場所』の心理的機能の構造とその発達の变化」『教育心理学研究』54 (3)、pp.289-299
- 小学生の国語編集委員会 (2011) 『小学生の国語4年学習指導書』三省堂
- 岡本千晴・岡田みゆき (2020) 「夜型子育てサロンの実態」『北海道教育大学紀要 教育科学編』71 (1)、pp.273-279
- 富永幹人・北山修 (2003) 「青年期の『居場所』」、住田正樹・南博文 (編) 『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 pp.381-400.
- 堤雅雄 (2002) 「『居場所』感覚と青年期の同一性の混乱」『鳥根大学教育学部紀要』36、pp.1-7
- 内田薫 (2020) 「住宅の居心地についての考察」『相模女子大学紀要』Vol.83.pp.1-9